

# 日本のことばと文芸

## 第一集

甲南女子大学国文学会

## 筆者紹介

- 守屋俊彦 本学教授・文学博士  
犬養 孝 本学教授・文学博士  
大槻 修 本学教授  
片山 享 本学教授  
真下三郎 本学教授  
松平 進 本学教授  
垣田時也 本学教授  
鎌田良二 本学教授

『日本のことばと文芸』 第一集  
昭和54年 月 日 発行

発行者 神戸市東灘区森北町6-2-23  
甲南女子大学国文学会  
代表 片山 享

装幀 皆川容子  
製作 和泉書院

# 日本のことばと文芸

## 第一集

甲南女子大学文学会編



目

次

『日本のことばと文芸』 第一集

神々の没落

——日本靈異記に関連して——

..... 守屋俊彦..... 7

東歌の世界.....

..... 犬養 孝..... 29

物語「有明けの別れ」の内大臣.....

..... 大槻 修..... 61

新風胎動

——建久元年東大寺棟上御幸時の歌について——

片山 享……………79

一件落着……………真下三郎……………97

文学と絵画

——浮世絵の古典憧憬——

……………松平 進……………111

堀辰雄と神戸……………垣田時也……………123

方言における待遇語……………鎌田良二……………141

あとがき



## 神々の没落

——日本靈異記に關連して——

守屋 俊彦

一

日本靈異記上卷第一縁は、題目に「雷を捉ふる縁第一」とあるように、栖輕という男が雷を捕えたという話である。それは二つの小話から成っている。第一は、

その時に空に雷鳴る。すなはち、天皇、栖輕に勅して詔りたまはく、「汝、鳴る雷を請け奉らむや」とのたまふ。答へて曰はく「請けまつらむ」とまをす。天皇詔りたまはく「爾らば汝請け奉れ」とのたまふ。栖輕勅を奉りて宮より罷り出で、緋の褌を額に着け、赤き幡杵を撃げ、馬に乗りて、阿部の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きて輕の諸越の衝に至り、叫囂び請けて言はく「天の鳴る雷の神、天皇請け奉る」といひて叫ぶ云々。然してここより馬を還して走りて言はく「雷神といへども何ぞ天皇の請けむを聞かざらめや」といふ。走り還る時に豊浦寺と飯岡との間に鳴る雷落ちたり。栖輕見て神司を呼び輿籠に入れて大宮に持ち向かひ、天皇に奏して言はく「雷神を請け奉りぬ」とまをす。時に雷光を放ち明く炫けり。天皇見て恐れ、偉しく幣帛

を進り、落ちし処に還さしめしかば、今雷の岡と呼ぶ。古京の小治田の宮の北に在り。

というのであり、第二は、

然る後時に栖軽卒りき。天皇勅して留むること七日夜、その忠信を詠び雷の落ちし同じ処にその墓を作りて、碑文の柱を立てられて言はく「雷を取りし栖軽が墓」といふ。この雷悪み怨ひて鳴り落ち、碑文の柱を踊る践み、柱の折かれし間に雷撲りて捕らる。天皇聞きて雷を放ちしに死なず、雷慌れて七日七夜留まれり。天皇勅して碑文の柱を樹てしめて言はく「生も死も雷を捕りし栖軽が墓」といふ。いはゆる古の時に名づけて雷の岡と為す語の本これなり。

というのである。そして、この二つの小話は、栖軽という一人の男の生涯の上に展開されている。生前と死後のとである。つまり、栖軽を主人公として、一つづきの話になっているのである。

しかし、この二つの小話は、もともと別々のものであったとみた方がよい。前者と後者とは、雷にたいする姿勢が異なっているし、何よりも、前者の終りが、「今雷の岡と呼ぶ。」と、雷の丘の地名の由来を説明した形で結ばれているからである。これは地名起源説話といわれるものであり、記紀や風土記、とりわけ風土記に数多くみられるものである。例えば、「屋代の郷、郡家の正東三十九里一百二十歩なり。天の夫比の命の御伴に天降り来し、伊支等が遠つ祖天津日子の命詔り給ひしく「吾が静りまさむ社」と詔り給ひき。故、社といふ。神龜三年、字を屋代と改む。」(出雲国風土記)というようなものである。

そして、その一般的な形式は、この例にみられるように、地名の由来を説明したことが、話の一番終りに付いているということであつた。すれば、第一の小話はあそこで終っているのであり、

これだけで話は完結していたものとみななければなるまい。だからまた、第二の小話も、その終りが、「いはゆる古の時に名づけて雷の岡と為す語の本これなり。」と、地名の由来を説明したことで結ばれているのだから、これだけで一つの話であったとみなければならぬのである。形式的にみても、二つの別々の話だったのである。それを、栖軽を主人公とすることによって、一つの話にまとめてるのである。なお、第一の小話の前に、雄略天皇が皇后と共寝をしているところへ、栖軽がうっかり入った、という小話が付いている。

## 二

一体、古代は、いうまでもないことだが、神々の時代であった。神が人々の上に立ち、人々を支配していたのであった。神は絶対であったのである。そして、わが国では、その神は一神ではなく、多神であった。人々はさまざまなものに神を認識していたようである。古事記をみると、

この速秋津日子、速秋津比売の二はしらの神、河海によりて持ち別けて、生める神の名は、沫那芸神、次に沫那美神、次に類那芸神、次に類那美神、次に天之水分神、次に国之水分神、次に天之久比奢母智神、次に国之久比奢母智神。

沫那芸神より国之久比奢母智神まで、并せて八神

次に風の神、名は志那都比古神を

生み、次に木の神、名は久久能智神を生み、次に山の神、名は大山津見神を生み、次に野の神、

名は鹿屋野比売神を生みき。亦の名は野椎神と謂ふ。

志那都比古神より野椎神まで、并せて四神

とあり、山には山の神が居り、野には野の神が居り、風の神も居れば、木の神も居る。河や海の泡の

神までも居る。また、その山の神にしても、「次に左の手に成れる神の名は、志芸山津見神、次に右の手に成れる神の名は、羽山津見神。次に左の足に成れる神の名は、羽山津見神。次に右の足に成れる神の名は、戸山津見神。」というような、端山や外山など、その山のあちこちにまた神々がいることになっている。それこそ八百万の神がいるのであり、いわゆる多神教なのであった。

しかし、これらの神々の中で、もっとも広く信仰されたのは、雷神と蛇神とであった。この二神が古代の人々の生活にもっとも深く結び付いているからであった。わが国の古代は農業社会であった。農業が彼等の生活の中心であった。その農業にとってもっとも必要なものは水であった。ところで、雷が鳴れば雨が降る、というところから、ごく自然な論理として、雷神は水の神となり、従って、農業を生活の中心とした彼等に広く信仰されることになったのである。蛇もまた、沢のようなところに生息しているところから、水の神となり、雷神とともに広く信仰の対象となったのである。そして、水の神というところから、これまた当然なこととして、この二神は農業神でもあったのである。だから、この二神は、ある意味においては、彼等の生活を支配していることになるのだから、彼等にとつては絶対的なものであったともいえるのである。

しかしながら、この上一の第一の小話をみると、その絶対的なものに翳りがみえはじめている。神としての權威が、少しではあるが崩れかけているのである。雄略天皇から雷を呼んでくるようにといわれた栖軽は、雷神にたいして、「天皇請け奉る。」と大声をあげて呼ぶのだが、雷神は応じない。そこで、こんどは、「雷神といへども何ぞ天皇の請けむを聞かざらめや」といっている。ここにみられ

るのは、雷神と人間との関係がやや逆になりかけているということである。人間の方から雷神に命令しているのである。二度目のことばでは、天皇の権威を借りてはいるのだけれども、雷神をおどしているようなところさえみられるのである。神としての雷にたいする信仰が絶対的なものであれば、少くともこのようなことばはでてこなかった筈である。栖軽の心の中にある、雷神にたいする信仰に、そっとすき間風が吹きはじめているともいえよう。

そういえば、彼は雷を呼ぶにあたって、「緋の藪を額に着け、赤き幡棒を撃げ、馬に乗」っている。天翔る雷を呼ぶために馬を走らせたというところであろうが、武装をしているような恰好で、神に接するといふよりも、強敵に立ち向かっているようにもみえる。天皇もまた同じような姿勢で雷にたいしている。皇后と共寝をしているところへうっかり入って来た罰として、栖軽に雷を呼ぶことを命じているのだが、たまたまその時に雷が鳴ったとはいえ、神としての雷にたいする絶対的な信仰があれば、雷を呼ぶことを、罰というような、きわめて俗なことの対象などにはしなかったであろう。天皇や栖軽がこのような姿勢で雷にたいしているところから、「鳴る雷落ちたり。」と雷も空から墜落することにるのである。雷が神であるならば、天降るのであって、墜落などはしないのである。

だが、今までみてきたのは、雷神にたいする信仰が崩れかけたところを、やや一方的に取り上げてみたまでであって、信仰そのものは依然として固いのである。栖軽は折角雷を捕えたというのに、自分だけで持ってゆかないで、わざわざ「神司を呼」んでいるのである。恐らくはこの神司に持ってゆかしたのであるが、神司は神主のことである。そこには俗な自分がじかに接することができないと

いう意識と態度がみられるのであって、雷を神として遇しているとみななければなるまい。天皇にしても、自分が命じた通りに、栖軽が雷を捕えたというのに、光り輝く雷の威力に恐れをなして、落ちたところに還している。そして、「偉しく幣帛を進」ったという。幣帛は神に奉る供物のことである。ここでは、天皇もまた雷を神として遇しているのである。

何れにしても、栖軽にも天皇にも、雷にたいする姿勢にはばらつきがみられるのである。神として遇するとともに、時には単なる雷として扱ってもある。そこから、雷についての表現も、一方では「雷神」としたり、他方では「雷」としたりして、不統一なものになっている。

### 三

ところが、次の第二の小話になると、雷の神としての権威はすっかり崩れてしまっている。栖軽が亡くなったので、天皇は、栖軽の忠信を偲んで墓を作り、碑文の柱を立てられることになった。ところが、その墓を作ったところは、こともあろうに、雷が落ちたところであり、おまけにその碑文には、「雷を取りし栖軽が墓」と書かれたとある。ここでは、雷の神としての権威などはまるで無視しているし、からかっているようなところさえもみられるのである。そこで、この雷は憎んで落ち、碑文の柱を裂いてしまうのである。そこまではまだよかったのであるが、逆にその裂かれた柱の間に、「雷撲りて捕」られたというに至っては、雷には、最早神としての権威は勿論のこと、その威力もなく、まことに哀れな姿というほかないのである。天皇の助力によってやっと放たれ死を免かれたのだが、七

日七夜も空に昇れず、「慌れて」いたという。雷ともあろうものが、放心状態でぼんやりしていたというのは、哀れというよりも、むしろ滑稽である。放心状態になって、そこらをぶらぶらしている雷の姿はユーモラスでさえある。雷神はまさに落ちぶれてしまったのである。最早神らしいところはないのだから、従って、ここでは、雷はすべて単に「雷」と表現されている。

このように、この二つの小話の内容を分析してみると、雷にたいする姿勢に明らかに落差がみられるのである。別々の話だったのである。それにしても、この二つの小話を並べてみると、そこに雷神にたいする信仰が崩れてゆく過程が鮮やかにみられて興味深いものがある。

さて、靈異記には、雷についての話が今一つある。上三の道場法師の話である。四つの小話から成っているが、その第一の小話はこの法師の出生譚であり、そこには、

昔敏達天皇

これ警余の訳語田の宮に國食しし淨名倉太玉敷の命なり。

の御世、尾張の国阿育知の郡片絶の里に一の

農夫あり。田を作り水を引く時、小細雨降るが故に、木の本に隠れ、金の杖を撐きて立つ。時に雷鳴る。すなはち恐れて金の杖を撃げて立つ。すなはち雷その人の前に墮ちて、小子と成る。その人、金の杖を持ちて撞かむとす。時に雷言はく「我をな害ひそ。我、汝の恩に報いむ」といふ。その人言はく「汝何をか報いむ」といふ。雷答へて言はく「汝に寄せて子を胎ましめて報いむ。

我が為に楠の舟を作り、水を入れ、竹の葉を泛べて賜へ」といふ。すなはち雷の言ふが如く作り備へて与へつ。時に雷「近く寄ることなかれ」と言ひて遠く避らしめ、すなはち嘸り霧りて天に登る。

とある。ここにもまた神の座から落ちかけている雷がみられるのである。ほかならぬ、農夫が姿をみせ、田に水を引いていた時に雷が鳴った、というところには、雷が水の神であり、農業の神であったことをかすかに示しているといえる。すれば、雷はもともと神として天降っていた筈なのだが、ここでは、「その人の前に墮ちて」と、空から墜落してきている。この点は上一の第一の小話と似ているのだが、ここから後の処置が異なっている。天皇や栖軽は神として遇しているのだが、農夫は杖で突いて殺そうとしている。神としてではなく、単なる雷としてみているのである。すると、雷は、「我をな害ひそ」と命乞いをし、そのためには、「汝に寄せて子を胎ましめて報いむ」と交換条件までだしている。抵抗どころではないのである。そこに威力衰えた雷の姿をみる事ができるのである。その後雷は、水槽と竹の葉を用意してくれと農夫に頼んでいる。水槽と竹の葉は、恐らくは雷が昇天するための呪具なのであろうが、それを人に用意してもらわねば昇天できないところに、やはり雷の威力の衰えがうかがわれるのである。この点は、上一の第二の小話の方に似ているのだが、放心状態であったというのに比べれば、なお少しはましな方かも知からない。だから、ともかく雷は雲や霧をまき起こして昇天することになるのである。衰えたとはいえ、なお余力を残しているともいえよう。このようにみえてくると、この小話に登場している雷は、上一の第一と第二の小話との中間ぐらいのところに位置している雷といえよう。なお、この雷は命乞いをしたり、交換条件をだしたりはしているが、小子の姿になっているだけに、憎めないところがあり、そのポーズにはどこことなくユーモラスなところがある。

靈異記にみられる雷の話はこの二話であるが、他の古文獻にもこれに類した話が幾つかみられるので、その中の一、二を取り上げて、靈異記の話の理解に役立たせてみたい。その一つは常陸国風土記逸文のものである。

昔、兄ト妹ト同日ニ田ヲツクリテ、今日オソクウエタランモノハ、伊福部神ノワザハヒヲカブルベシト云ケルホドニ、妹ガ田ヲオソクウエタリケリ。其時、イカヅチナリテ、妹ヲケコロシツ。兄大ニナゲキテウラミテ、カタキヲウタントスルニ、其ノ神ノ所在ヲシラズ。一ノ雌雉トビ来リテ、カタノウヘニキタリ。ヘソヲトリテ雉ノ尾ニカケタルニ、キジトビテ伊福部岳ニアガリヌ。又其ノヘソヲツナギテユクニ、イカヅチノフセル石屋ニイタリテ、タチヲヌキテ神雷ヲキラントスルニ、神雷オソレヲノキテ、タスカラン事ヲコフ。「ネガハクハ君ガ命ニシタガヒテ、百歳ノノチニイタルマデ、キミガ子孫ノスエニ雷震ノオソレナカラン」ト。是ヲユルシテコロサズ。キジノ恩ヲヨロコビテ、「生々世世ニ徳ヲワスレジ。若違犯アラバ、病ニマツハレテ生涯不幸ナルベシ」トチカヘリ。其故ニ其ノ所ノ百姓ハ、今ノ世マデ雉ヲクハズトカヤ。

この話では、兄が刀を抜いて雷を斬ろうとしたり、雷が、「タスカラン事をコフ。」と命乞いをしたり、そのために、「キミガ子孫ノスエニ雷震ノオソレナカラン」と交換条件をだしているなど、上三の小話と全く同じものになっている。同じ位置にある話といえよう。ただ、この話で注意しなければならぬのは、雷と絡んでいる人物が、上三の小話では農夫一人であったのにたいし、兄と妹との二人になっていることである。とりわけ妹という女性が登場していることである。その妹は、「イカ